

2019年4月28日

福音書からのメッセージ

そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」

(ヨハネによる福音書 20章 25節)

今日の箇所は、二つの場面に分けられます。前半が復活日の夕方の出来事、そして後半のトマスが出てくる物語は復活日の一週間後、ちょうど今日の物語と言ってもよいものです。復活日の朝、マグダラのマリアが「わたしは主を見た」と弟子たちに告げました。弟子たちはそれを聞いて、どう思ったでしょう。喜びに満たされていたのでしょうか。

彼ら弟子たちは、その日の夕方、ユダヤ人を恐れて自分たちのいる家の戸に鍵をかけていたとあります。確かに今、ユダヤ人たちに見つかったら、「お前たちも仲間だった。捕らえてしまえ」となるかもしれません。そもそもそれが怖かったから、彼ら弟子たちはイエス様を見捨てて、逃げてしまったわけです。

しかし彼ら弟子たちが恐れていたのは、ユダヤ人だけではなかったのかもしれませんが。弟子たちはイエス様を見捨てました。逮捕されるときも、十字架に架けられたときも、そしてお墓に葬られたときも、イエス様の元から離れていたのです。彼らは、扉に鍵を掛けました。それはユダヤ人たちが部屋に入ってこないようにするためです。でもさらに、弟子たちはイエス様をも恐れ、自分たちの心の扉にも鍵をかけていたのかもしれませんが。マグダラのマリアが何を言っても、その言葉は入ってこなかったかもしれないのです。

マグダラのマリアは、イエス様の十字架



の元にいました。そして真っ先に墓に向かいました。素晴らしいことです。イエス様に会いた

い、その思いが伝わってきます。でもみんながマグダラのマリアのようになれるのではない。現に弟子たちは、部屋の外に出ることができずに震えていました。しかしその中でも、イエス様は来てくださるので。すべてのものに鍵をかけ、心の扉も開かず固まっているそのただ中に、イエス様が来て下さる。みなさんも経験がないでしょうか。不安で、悲しくて、どうしようもなく心がざわめくとき。怒りが止まらず、その思いが神さまにまで向いてしまうとき。孤独で、何もする気が起こらず、生きている意味が見いだせないとき。そんなときにふと感じる温もりがある。温かい物に包まれる気がする。そっと寄り添ってくれる存在を感じる。

「あなたがたに平和があるように」、イエス様は言われます。まさに「主の平和」です。弟子たちにも、そしてわたしたちの心にも平安を与えてくださる、それがイエス様。そしてそれが復活のイエス様との出会いです。

聖書は後半のトマスの物語と続きます。そして「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」、その言葉は何度でも、わたしたちの元にも届けられているのです。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>